

畜産

【飼料作物】

◎牧草の刈り取りと保管

永年性牧草一番草の収穫作業がほぼ完了する頃です。ロールベールラッピングで保管の場合、ラップの収縮は1か月程度で硬化し型崩れしにくくなりますが、柔軟性が低くなっていくことから、移動させる際は表面が破れやすくなっているため取り扱いには十分注意してください。

また、保管の際は鳥獣による悪戯も考慮されるので、必要に応じてテグス（糸）を張り鳥害対策をしたり、ネズミ対策として猫の通れる程度の間隔でロールを並べるなどの対策が考えられます。

◎飼料トウモロコシの管理

5月の播種作業後の除草剤については、播種直後の散布による雑草種子発芽抑制タイプと雑草生育中に薬剤成分の吸収により生育阻害させるタイプがあります。処理する際は対象雑草の適用葉齢がありますので、対象農薬の説明書を確認してから散布してください。

【酪農】 福島県 1000kgUP 酪農より

◎乾乳前期はルーメンや乳腺細胞のリフレッシュ期間

乾乳期間が短いと、乾乳前の泌乳期間中に、濃厚飼料の多給で酷使したルーメンや乳腺細胞の十分な休息や再生ができず、次の乳期の乳生産に影響します。乾乳期間が長いと過肥になりやすく、分娩前後に脂肪肝やケトosisが発生しやすくなります。仮に、乾乳期間を9週間とした場合、乾乳に入ってから最初の6週間は、粗飼料主体の給与を行いルーメンや乳腺細胞を休息(リフレッシュ)させます。

◎乾乳後期は泌乳開始に向けた助走期間

クローズ・アップ期には十分な栄養分を給与する必要がある。給与飼料に対して、ルーメン内の微生物が適応するためには少なくとも3週間が必要です。また、ルーメンが分娩後の高栄養飼料を十分に消化・吸収できるようになるには5週間程度かかるため、分娩直前の3週間はできるだけ分娩後の泌乳期用の飼料構成に近づけるようにします。

◎周産期の乾物摂取量

分娩が近づくにつれて乾物摂取量は減少し、分娩前1～2週間にはそれまでの乾物摂取量の90～70%に減少します。

◎分娩直前の食い込みが良いと・・・

分娩直前の乾物摂取量が多ければ多いほど、分娩直後の乾物摂取量は多くなり、分娩前の採食量が少ないほど、分娩後に脂肪肝やケトosisの発生が増加します。分娩直前の3週間でエネルギー及び粗タンパク質の給与量を増やすことにより、代謝病の発生を少なくすることができます。

◎分娩直前3週間の粗濃比は7：3

粗濃比9：1の粗濃比では、分娩直前の乳牛はエサの乾物すべてを食い込まず、分娩前の3週目頃から、TDN摂取量も急速に減少します。一方、粗濃比5：5のエサでは、同様のエネルギー

一を充足できる乾物量は約 10kg で、この程度であれば分娩直前でも食べ残さず、分娩直前になっても TDN 摂取量は減少しません。そこで、分娩前 3 週目以前の TDN 含量は 56~57%、分娩前 2 週目は 60% 程度、分娩直前の 1 週間は 63% 程度。給与飼料の TDN 含量が 56~57% であれば粗濃比は 9:1 で十分ですが、60~63% ならば 7:3 ~ 6:4 にまで粗濃比を変える必要があります。

【繁殖和牛】 二産後以降の繁殖牛（経産牛）の管理 肉用繁殖牛飼養管理の手引きより

二産時には早い牛でも 35 カ月齢頃に、発育量は 0.1kg/日以内となります。自身の発育に要する飼料は考慮する必要がなくなり、維持期で日量へイキューブ 1 kg、やや刈り遅れのイネ科乾草又は稲ワラ 6 kg、濃厚飼料 1 kg をベースに、授乳期は濃厚飼料を 2 kg 増量、妊娠後期 2 カ月は濃厚飼料 1 kg 増量します。経産牛は、加齢により基礎代謝量が減少するため太り易くなります。牛の栄養状態（ボディコンディション）を見ながら飼料の減量等が必要となります。なお、ボディコンディションの調整は、受胎を確認し安定期に入ってから妊娠後期に入る前まで（分娩予定 6 カ月前～3 カ月前）の期間に実施します。また、妊娠後期の飼料減量は虚弱産子や分娩遅延につながり易く、分娩後の飼料減量も産乳量の減少や子宮回復遅延・卵巣機能低下を引き起こし易いので、くれぐれも注意が必要です。

◎授乳期・へイキューブ 1 kg・イネ科乾草又はストロー類 6 kg・繁殖配合 3 kg ◎維持期（離乳～分娩 2 カ月前まで）・へイキューブ 1 kg・イネ科乾草又はストロー類 6 kg・繁殖配合 1 kg ○ 発情観察を入念に行う。○ 離乳後は授乳負担が少なくなるため、卵胞腫種が発生し易い。（分娩 6 カ月前～3 カ月前）

○栄養管理の徹底によって疾病の防止を図る。（ボディコンディション）

◎妊娠後期（分娩 2 カ月前～）・へイキューブ 1 kg・イネ科乾草又はストロー類 6 kg・繁殖配合 2 kg ○胎児の発育のため濃厚飼料を増量する。（濃厚飼料の増給は日量 0.5kg を限度に 2 回に分けて増給する。）参考（分娩 1 カ月前）夕方に飼料全量を 1 回で給与すると、ほとんど日中に分娩する。

【肥育牛】 超音波による枝肉形質の変化 俵牛づくりに挑戦しよう！より

◎超音波を用いての枝肉形質の肥育中の変化は、鹿児島大学肉用牛改良研究所報告第 4 号(1999 年)で発表され「黒毛和種去勢において、ロース芯面積、バラの厚さ及び脂肪交雑は肥育開始後 14 ヶ月、月齢で 20 か月前後まで、ほぼ直線的に増加し、それ以降の増加は緩やかであった」としてありますが。その内容を見ると、等級が高い肉牛ほど 20 か月齢以降の BMS が増加するようで、20 か月齢以降の飼養管理、飼料摂取量の維持が極めて重要なことを示しています。

◎もう一つの論文 栃木県畜産試験場 日動超研報 No. 1 (2009 年)では「肥育末期になっても脂肪交雑の発達が見られ、より脂肪交雑の高い群においてその傾向が顕著である」と記載されています。

◎2つの論文から、生後 20 か月齢以降もサシが入り、ロース芯面積も大きくなるので、24 か月齢以降もビタミン A を下げながら、うまく補給すべきで、ダラダラと VA を補給しないこと。生後 20 か月齢以降の濃厚摂取量などが極めて重要であることを示しています。